

第四章 神の大いなる意志



## 人生の目的は靈性進化

人は何のために生まれてきたのでしょうか。これは昔からの哲学の根本の問題でした。たいていの人は、一度は青年時代にふと考えてみたりします。しかし、はつきりしないうちに、社会に出て働かねばならなくなり、衣・食・住の三つをたつぷり手に入れることが、人生の目的ぐらいに考えて人生を終わります。

しかし、本当にそうでしょうか。もし、人生にはちゃんとした目的があり、私達がその目的と違った生き方をしていたら、その人の生涯は大失敗です。

そうです。この世にはレッキとした人生の大目的が決まっています。そんな馬鹿な！と思われる向きも多いでしょう。それは、学校ではそんなこと教えませんし、科学でもそんなことを言っていませんから。それは個人個人の考え方の自由に任されていますから。

しかし、この人生にはレッキとした目的があるのです。それは、心靈研究で、科学や常識では隠されている、靈的真理（これこそ宇宙を創り、宇宙を動かし、生命を支配している天地の法則）を知るとき、はつきりとその存在が分かるのです。

それを神の大いなる宇宙意志と呼びます。すなわち、神がこの宇宙をお創りになり、万有の生命をお産みになり、その生命達をどこかへ連れて行こうとしておられる、その意志であります。

シルバー・バーチは、それを次のように教えています。「この世は学校です。魂がいろいろなことを学ぶための訓練所です」「この世もあの世も通じて、人生の究極の目的は、靈性の進化です」と。

つまり、「靈性の進化（魂の浄化向上）」これが人生の目的です。すなわち神の大いなるご意志です。

神とは光であり、生命であり、愛であり、宇宙を創り動かしている法則であり、またそのエネルギーであるとともに、また大いなる意志であります。神はレッキとした意志をお持ちになって、宇宙を創り、今なおそれを一定の方向へ動かしておられるということです。

そのご意志とは、進化。人生の目的が靈性進化であるように、宇宙そのものの目標も進化です。ですから、この地球では、鉱物が植物になり、植物が動物になり、動物が人間になり、人間が神々になり、神々がさらに何物かになるために、進化をつづけています。宇宙とは生々

発展、神とは生々発展のご意志そのものなのでしょう。

神の子である人間には、その神のご意志が込められています。ですから、バーチの言うように、「霊性進化」これが人間の本性、また生の目的そのものなのであります。

物質しか見ていない科学にはこれが分かりません。衣食住のことしか考えようとしないう日常の常識では、このことはさっぱり見えません。こうして人間は、自分を創り、自分を動かしている、大きな意志がありながら、そのことを少しも知らずにいるのです。

このことは大変なことです。私達は、いわば神の意志という大きな親船に乗せられて、どこかへ運ばれているにもかかわらず、一向にそれを知らずにいるのです。ですから、自分勝手な方向に進もうとしては、船からこぼれ落ちて、不幸になっています。

神が親であり、子供である私達が、有無を言わせずある一定の方向に運ばれているならば、この意志に逆らうことは不幸の原理であり、これに従うことは幸福の原理であります。すなわち、この人生には、レッキとした幸不幸の原理があるのです。それは、神の意志を知り、これに従うことが幸福の原理。反対に、この意志を知らず、これに逆らうことが不幸の原理。問題はきわめて単純であって、しかし、ことはきわめて重大であります。すなわち、神の大

いなる意志の存在を知るか知らないか、ただこの一事が幸福の鍵であります。

そこで、もうお分かりいただけたことですが、人間が幸福になる秘訣は、「靈性進化」に努めること、この一事です。すなわち、魂の浄化と向上のために全人生を捧げ尽くすことです。また、幸福とは魂の浄化向上そのものことであります。すなわち、全人生の一挙手一投足をあげて、精神の喜びに生きること。職業生活、家庭生活、対人生活のすべてにおいて、物質よりも利害よりも、精神の価値を重んじること、これであります。

すると、そんな馬鹿な！精神だけで飯が食えるか。着物は、住宅は、子供の教育費はどうするんだ、とすぐ反論が出ます。

おっしゃるとおりです。精神だけではご飯になりません、着物にも住宅にもなりません。しかし、ここで人はみんなつまづくのです。実は、人間は霊であり、肉体は外被だということとは、どういうことかという、衣食住の物質生活は、魂が浄化されているか汚れているか、その反映だということです。すなわち、浄化された魂には、安定して必要な衣食住が約束され、汚れた魂には、それに応じた欠陥が生じるということです。かりに、汚れた魂にあり余る衣食住があるとしても、その他の現実生活、たとえば対人関係、家庭生活、身体の健康上などに、

それ以上の欠陥と苦痛が生じるということです。

ちょうど、スライド（幻灯）における、ネガ（原板）と映像の関係がこれです。魂がネガで、現実の生活のすべてが映像です。たとえば、美しい魂のネガからは、美しいカラーの映像が、汚れた魂のネガからは、暗い黒白の映像しか映りません。これは原理です、法則です。人はこの原理を知らないのです、カラーの映像（幸福な現実生活）が欲しいばかりに、魂はそっちのけにして、ただただ物質を、お金を、利害をと狂奔します。その結果、逆に魂を汚して、その映像（現実生活）は暗く黒くなるばかりです。原理がある限り、問題は至って簡単です、貴方はネガを取り換えればよいのです。美しい魂のカラーのネガに。

すべて、魂の浄化が原因であって、物質生活も、身体の健康も、家庭や人との関係も、目に見える現象のいっさいは、その結果であります。人は良い現象が得たいばかりに、原因を変えることはせずに、ただただ映像である結果に一喜一憂ばかりしているのです。

宇宙に大いなる神の意志があり、その意志が「進化」であり、人生の目的は「靈性進化」であるならば、したがって、浄化された魂こそが幸福の原因であるならば、日々の生活のすべてをあげて、貴方の全人生を捧げて、ひたすら心の喜びを求めて、物質的利害よりも精神

の価値だけを求めて、生き続けねばなりません。これが神のご意志です。また天地を貫く不變の原理です。

神はこのご意志を、狂いなく実現なさるために、魂を磨いたら幸福になり、魂を汚したら必ず不幸になるという、法則を定めておいでになります。その法則が「波長の法則」です。

簡単にポイントだけお話しします。音や電波や光と同じように、思念も波動であります。淨い心からは精妙な波動、汚れた心からは粗雑な波動を発します。靈魂も思念を持っていますから、淨化した靈魂からは精妙な波動、邪悪な靈魂からは粗雑な波動を発します。人間と靈魂の波動は、互いに同調し合い、同じ波長を持つ靈魂が人間に感応憑依して、人間に影響を与えます。

こうして、人間の心とは、自分一人が作る心ではなく、絶えざる靈魂からの思念の影響を受けて、その心は、いわば多数の靈魂との共同制作物です。この心に従って、私達は考え、行動し、職業生活でも、家庭生活でも、対人関係でも成り立っています。また、靈魂の思念が直接身体にも影響を及ぼして、肉体を健康にしたり、病気にさせたりしております。こうして、人間の物質的生活、対人関係、肉体の健康不健康は、靈魂との関係なしには考えられ



ません。

しかし、どのような靈魂と感応同交するかは、まったく本人の魂の浄化の程度いかんによります。すなわち、本人が淨い精妙な波動の思念を発しているか、汚れた魂の粗雑な波動の思念を発しているか、まったくこれ一つです。しかもそれによって、自己の物質的生活も、対人関係も、健康も不健康も決まるのですから、結局、自己の人生の幸不幸を決めているのは、自己の魂の浄化程度いかんです。

神はまことに公平です。神様に頼んだら幸福になるとか、靈能者に見てもらって、こうしたら幸福になるからこうしなさいと言われたとおりにしたら幸福になるとか、そういうものでは決してありません。また、うまいことを言って人をだましたり、幸福になろうとして人の物を奪ったり、人の上にのし上がろうとして、人を押しつけ、蹴とばし、支配したら幸福になれるとか、そういうものでも決してありません。

法則によってえこひいきなく、一分一厘の狂いなく正確無比に、人の幸不幸の量は決められています。貴方の発する思念が淨らかであるか、または汚れているか、ただそれだけによつてです。ですから、貴方の現実生活の幸不幸の決定者は貴方です。貴方の魂が汚れているか

淨らかであるか、ただその一事です。

ですから、貴方の心の中の欲心、またいろいろな悪感情（恨み・憎しみ・悲しみ・怒り・焦りなど）これが、貴方を不幸にする元凶です。これに反し、愛・同情心・親切心・向上心・自制心などが貴方を幸福にする鍵です。ですから、バーチの教えのとおり、靈性進化、これこそが唯一の幸福の秘訣です。何となれば、それが神の大いなる意志、宇宙の法そのものですから。

しかし、バーチはもう一つ教えていますね、「この世は学校、魂の訓練所である」と。そうです。この宇宙に神の大いなる意志があり、その意志とは魂の浄化向上であり、だから、欲心と悪感情を捨てて、愛と向上心と自制心を持ってばよい、そう思ってもドッコイそうはいかないのです。簡単にそうはいかないように、神がちゃんと仕掛けをしておられるのです。神は意地悪なんでしょうか？ いいえ、私達が試練を超えて、真実に魂の浄化を自分のものとするためにです。つまり、人間が神々になるためには、地上という魂の訓練所を、どうしても見事に卒業しなければなりません。親心です。

さて、神が地上に仕掛けられた罠が二つあります。一つが、靈に肉体の衣を着せられたことです。その日から、靈は衣食住を求めて労働せねばならなくなります。この点が、靈の世

界と地上とのまったく違うところでは、靈界では肉体がないので、衣食住のための労働はまったくありません。靈達はひたすら靈性の進化に努めていけばいいのです。物を求めて欲心を出したり、物のために他者と争って、悪感情をもつ恐れが何もないのです。

地上に、神が仕掛けられた罠の第二は、地上を、ピンからキリまでのいろいろな程度の魂の集合所とされたことです。この点がまた、地上と靈の世界とがまったく違うところでは、靈界では、同じ浄化程度の魂だけが集まり、趣味志向から、気心まで似かよった者同志で一つの境域を作ります。だから何の争いもなく、共同して靈性進化に励んでいけるのです。

ところが、地上はそうはいきません。神々のような聖者から、まさに地獄の住人というべき者まで、同一平面場に集められています。たまたまものではありません。しかもその上、肉体の衣まで着せられています。ですから、どうしても衣食住を調達するために、これら気心も趣味志向も、また魂の程度もまったく違った者同志が接触せねばなりません。しかも、死ぬまで生涯、二六時中、この試練が続きます。地獄から来たような亡者どもは、したい放題の悪の限りをします。サマーランドあたりから来た中くらの人達は、正直ばかりでは食えないと四苦八苦します。高級靈界から来た聖者にしても、悪人達に足を引っ張られて、身

を引き裂かれる思いです。

こんな所で、どうして、ただ靈性進化にだけ努めておられるでしょうか。欲を持つな悪感情を出すなといったって、悪人達がいる限り、聖者にしても安閑としてはおれません。平均的な人達は、自己を守るためには、争っても、時には人を押しつけ、だまし奪い殺してまでも思い込みだらけます。とにかく、悪だけが楽しみだという、地獄の亡者どもが相当数同居しているのですから。

こうして、地上は、どうしても争いの場、奪い合いの場、殺し合いの場となるように仕組まれているのです。しかし、こういう中でも、幸福になる原理はただ一つ、宇宙を貫く神のご意志なのです。すなわち、ひたすら魂の浄化向上、そのみが物質生活と身体の上に調和と安定をもたらす、そのほかに原理はないとされているのです。このことを百パーセント狂いなく実施するために、波長の原理が宇宙の隅々まで張りめぐらされているのです。

これをもって、地上が、いかに特別の試練場であるかが分かります。私達は、何回も何回も繰り返して地上に生まれてきては、聖者と中位の人と地獄の亡者とが鼻つき合わせながら、その中から唯一の真理、魂の浄化向上こそがただ一つの幸福の原理である、この神の大いな

る意志を発見しようとしているのです。

### 危険な他力依存の心霊し者

人が宇宙の意志に従って、靈性進化を遂げるためには、それに必要な靈的知識をどうしても学ばねばなりません。何となれば、神は宇宙の進化をすすめるために、いくつもの法則を作っておられるからです。この知識をもつことは当然進歩の早道です。ただし、これらの知識は靈的なものです。つまり、学校でも、科学でも教えてくれません。したがって、スピリチュアリズムとか、宗教を通じて学ばねばなりません。しかし、宗教の中には、法則が作られた大本の神の意志（靈性進化）をケロリと忘れていくものが多くあるので、そこに相当な危険があります。進歩どころかいのちとりにもなりません。この危険については後述しますが、したがって、スピリチュアリズムによって正しい靈的知識を学ばれることをすすめます。

人が靈性進化のために、まず知らねばならない第一の靈的知識は、靈魂の存在です。すなわち、自分が靈であること、死後存続することです。これを知らなくて、どうして靈性進化

ができませんか。自分が霊であればこそ、魂を磨く気にもなるのです。死後存続すればこそ、あの世までは持つていけない物質や現世的利害よりも、精神とか魂の徳を重んじたりもするのです。ですから、霊魂の存在を知るとは、霊性進化のための第一の霊的知識です。

第二に必要な霊的知識は、これら霊魂の作用を知ることです。死んだ霊魂はぼんやりとあの世で暮らしているのではない。この世の人と絶えず感应同交し、憑依までもするという事実を知ることです。これを知らない人は、人生について盲目同然です。何となれば、私達の心も行為も、幸福とか不幸の出来事も、運命全体の背後には、これら霊魂の作用が深く及んでいるのです。したがって、霊性進化のためには、これら霊魂との関係をどう処理するかが、大きな問題となるのです。

今日では、おおむねこのあたりの知識まで、漠然と知る人が増えました。それはテレビとか、人の話題とか、漫画のような本によってさえも、こういうことが取り上げられるようになったからです。ですから、人は死んでも幽霊になるそうだとか、自殺とか殺人とか災厄の背後には、霊魂のたたりや憑依があるらしいとか、そのあたりまでの常識です。

しかし、こういう心霊常識の浸透に乗じて、雑多な心霊書が氾濫しています。自称心霊研

究家、靈能者、行者のような人まで、心靈に関する本を書いています。こうして、一部の人々には雑多な心靈知識が入り込んでいます。しかし、これははなはだ危険なことです。

神が靈的真理（法則）をお作りになったのは、最初に述べたように、万有の進化のため、人間の靈性進化のためです。ところが、これら心靈書の多くには、この根本の神の大目的が無視ないし軽視されているのが多いのです。たとえば、靈能發揮のため、財運とか、縁談とか病氣治しの現世利益のため、あるいは神秘的好奇心を単に満足させるだけのもの。これは非常に危険なことです。靈的知識が靈性進化以外のことに使われれば、いのちとりになります。ちようど、狂人に刃物のような逆効果を發揮します。

さて、このことは、単に雑多な心靈書による被害だけにとどまりません。正式の心靈研究をかじった人の上にも、同様なことが起こるのです。それは心靈知識の根本が、神の定められた大目的——人間の靈性進化（靈の浄化と向上）のためにある——これを忘却してしまった場合です。心靈知識を自分の現世利益や、靈的好奇心のために利用しようとした場合です。それはまったく同様ないのちとりになります。

そのいちばん大きな事例が他力除靈です。人が病氣とか災厄にあう場合、ほとんどの場合、

背後に靈が作用しています。右に述べた靈的知識をもつ人は、このことに気づきます。もし正しくスピリチュアリズムを学んだ人なら、自己の靈性進化によつて解決しようとしています。しかし、一知半解の靈的知識の人は、または心靈研究を生かじりただけの人は、すぐ次のように考えます。たとえば病氣になつたのは、背後に悪い靈が働いているからだ。だから、これを除きさえすれば病氣は治ると。そこで、靈術師や現世利益的宗教団体に走つて、除靈してもらおうとします。これが他力除靈です。

理屈は通っています。知識の上からだけすれば合理的で、これで病氣は治るはずですが。ところが治るところか（一時的に治つても、再発したり、余病を誘発したり、まかり間違えば他の災厄に転じたり、あるいは一命を落としたり）、結果は必ず悪いのです。なぜかというと、病氣は、それを通じて魂を磨きなさいという、神の大いなる意志、その目的のためにあるのです。しかるに、本人はその意志をまったく無視し、自分に都合の悪い靈だけを払ってもらおうとしたのです。これはエゴであり、神の靈性進化の目的にまったく反しています。したがつて、神の法が働いて結果はまったく悪くなるのです。

ただ、他力除靈の中には、これを通じて本人の魂の進歩をはかろうとする靈的指導者がい



ます。これは他力自力の兼ね合いですから、悪いものではありません。私がここでいう他力除霊とは、本人も術者も、魂の浄化を無視した他力依存の除霊のことです。

これがなぜ悪いかというと、かりに除霊されたとしても、本人の魂の浄化はないので、本人の心からは今までと同じ心の波動が放射されています。これは波長の法則によって、再び除霊された霊を呼び戻すことになり、病気は再発します。それだけでなく、その霊は除霊されたことを恨んでいるので、別の凶悪な霊と一緒に帰る、そのために余病や別の災厄を招きます。

かりに、その術者に心得があつて、憑依している霊を説得して、納得の上で除霊（浄霊）していれば、その霊は戻って来ません。しかし、本人の魂の浄化がなければ、以前と同じ波動を放っているのです、波長の法則で、別の同じ程度の低級霊を引き寄せ、何かの災いを招きます。それだけでなく、このような他力除霊を重ねると、本人の魂は他力依存の弱い性格となり、このような弱い性格には低級霊が憑依しやすくなるので、次々と病気や災厄の巣となります。

いいえ、回を重ねずとも、ただ一度の他力除霊で生命を失うことすらあります。その人が

焦つて、効験がないからと、あちこちの霊媒や宗教団体をまわると、そういうことになりま  
す。こういう霊媒や宗教団体の背後には、たちのよくない霊が働いているので、もしまわつ  
た先で効験でもあれば活券こけんにかかわると、先まわりして本人を狂気にしたり、殺したりする  
のです。ただ単に、他の霊媒や宗教へ走つたというだけでも、恨んで仇あだをします。

他力除霊の危険は一杯です。手のこんだ宗教霊は、一度はその病気なり災厄なりを除いて  
くれます。簡単な病氣治しや、宝くじに当てさせることぐらいします。場合によつては、本  
人に憑依している邪霊と結託して、病氣が治つたように見せかけます。それだけでなく、思  
わぬ幸運を転がり込ませたりもします。しかし、それは最後に本人をもてあそぶためです。  
本人はそんなこととは知らず、これはまさしく神の仕業であると信じ込みます。そこが付け  
目です。邪霊は思いのままに本人を操り、未は財をしぼり、事業を狂わせ、家庭を破壊し、  
本人を滅亡させるのです。

なぜこういうことになるかというと、本人がせつかく霊的知識を学びながら、それが神の  
大いなる意志である、人間の靈性進化のためにあるのだということを、学ばなかつたため  
です。かえつて、これを自己の現実の利益のために、安直に利用したためです。他力除霊はそ

の最もずるい利用の仕方です。

その責任はまた、これを受け入れる霊能者や宗教教団の側にもあります。故意に人々を墮落へ追い込もうとする地獄の道案内人は別として、受け入れる側の霊的知識の低級さにもよります。

一知半解の霊的知識ならない方がいいのです。危険です。しかし、人の進歩のためには、どうしても霊的知識が必要です。それなら、必ず霊的知識の目的である、神の大いなる意志（人間の霊性進化のため）、これを肝に銘じねばなりません。それとともに、もう一步二歩の霊的知識の学習も必要となります。

### 進歩が頭打ちの反省魔

前記の他力依存の人は、心霊知識のゆえに身を滅ぼす、いわば心霊亡者です。このような人の心霊知識は、おおむね、テレビの心霊番組に出てくる因縁話や、自称心霊研究家の書く心霊書の域を出ていません。すなわち一知半解の心霊知識なのです。それには肝心のもう一

段上の心霊知識、「波長の法則」が抜けているのです。この点、正規のスピリチュアリズムを学んだ人は、この法則を知りますので、他力依存となりません。

すなわち、自己の病気なり災厄なりは、自分が原因で招いたものであることを知っているからです。つまり波長の法則によって、自分の心掛けに欠陥があるから、良くない波長が出て、そのためにこれと同じ良くない波長を持つ低級霊と同調し、したがって、自分がその霊を引き寄せて災厄を招いた、「自己責任」をこの人は知っています。

したがって、彼は霊術師やご利益宗教の門を叩いて、他力除霊で身を滅ぼす、愚かな心霊亡者の危険な道ととりません。

彼は波長の法則に従って、反省によって、自己の魂を浄化しようとする、賢明な道を選びます。すなわち、自分が低級霊を引き寄せたのは、自分の心に欲とか感情とか良くないものがあったからそうだったのだ、だから反省で欲や悪い感情を消して、その病気なり災厄なりから立ち直ろうとします。

まことにもっともな、誠実そうな道です。法則にかなった、もし法則に狂いさえなければ、必ず彼の思うようになる、いわば理性的な道です。ところがドッコイ、なかなか彼の意図し

たようにならないのです。

彼は、心靈研究によつて「波長の法則」には狂いがないのだから、病気がよくなるのは、自分の反省が足りないからだ、と思いつめ、さらに反省に反省を重ねます。いわば反省魔になります。しかし、それでも病気なり災厄なりは消えないのです。

ここで、一部の焦つた人は、その病気なり災厄なりから逃れたいばかりに、せっかく学んだ心靈知識はどこへやら、靈術師やご利益宗教の門を叩き、他力除靈の道をとります。これは最も危険な道です。何となれば、靈的真理を知るといふことは、それを守らなければならぬ義務がその人にあるわけです。この人はその義務を放棄したのですから、当然その罪は重いのです。身の破滅がこの人の前途に待ちうけています。

さて、そうでない反省魔となつた人は、右の愚かな道をとらないだけ、その人は救われます。しかし、反省魔となつた人は、なかなかそこから脱け切れないのです。いちようにこの人達は、もつともらしい顔をしてもつともらしいことを言い、禁欲的で生活は一見けなげに見えます。しかし、顔付きは暗く、常に大地の方へうつむいています。当然、心が暗いから、暗い波長を発しており、波長の法則によつて、高級靈（守護靈など）との感応は起こらないので、

その運命は開かれなままです。

この人の場合も、心靈知識が仇となっています。「波長の法則」で自己責任を知ったばかりに、禁欲で心が暗いのです。暗いから運命は開かれず、したがって、繰り返し災厄の波はやって来て、この人は一段と反省魔になるばかりです。

靈的真理を学ぶことは、人間の進歩の道程で大事なことです。しかし、知ったがゆえに、反省魔となり進歩が停滞するのは、どういうことでしょう。おそらく、この人には大きな欠陥があるのです。何でしょうか？

私には、幸か不幸か、大きな病気をした体験がないので、奇蹟的に治癒したというような靈的体験がありません。しかし、私が若い頃、ちょうど右に述べたような反省魔であった頃、小さな経験ですが、反省魔の欠点を思い知らされた、私にとっては貴重な体験があります。それを記して、次の進歩への道を探りたいと思います。

六月か七月の初めの頃、私は夏風邪をひいて勤務を休みました。まったく珍しいことです。十数年も無遅刻無欠勤で過ごしてきた私にはです。発熱はないのですが、どうにもひどい偏頭痛で起き上がることが出来ないのです。ナニ風邪くらい、と高をくくった私は、一、二日

もすれば治るだろうと寝ていました。ところが一向によくならないのです。三日目くらいから、これは心霊の原理に基づいて、自分に反省すべき点があるから病気になったのだ。自分の心を反省して浄化しさえすれば、必ず治る、そう考えて反省を始めました。いや、何から何まで総ザライ、反省に反省を重ねたのですが、風邪はビクともしません。ひどい偏頭痛はそのままで。さすがに五、六日もたつと私はあわてました。こんなはずはない。それよりも勤務を休んでいることがひどく気がかりで。しかしその「風邪くらい」なのに、ひどい偏頭痛で立ち上がることもすら出来ないのです。

焦りにあせり、あわてにあわてた私は、とうとうサジを投げました。ちょうど一週間目くらいだったでしょう。熱がないので、シャツとステテコ姿で畳の上に寝ていた私は「エークソ、どうにでもなれ!」と、私は今までの反省の姿勢を投げ捨てました。私にとつては、今まで学んできた心霊の勉強を放棄するくらいの気持だったのです。といって、別に神聖な気持ではなく、むしろ、ヤケクソに近いような気分でした。

ところが、どうでしょう。そう思った本当にその瞬間から、身体がみるみる熱くなってきました。初夏といっても、まだステテコ姿で畳にころがっていれば、ちょうどよい気温なの

に、身体中が燃えるようで全身から汗が吹き出してきたのです。私はあまり唐突なことなので、びっくりして、アレヨアレヨという気分でした。三十分ほどすると、それがおさまったので、私は起きて、全身汗びっしよりの身体を拭きました。ところが、どうでしょう。あれほど頑固だった偏頭痛が跡形もないのです。それどころか、心身の爽やかなことといったら、全身を涼風がサヤサヤと吹き抜けている心地です。

ほんとにささやかな経験でしたが、私には、あまり唐突だったので貴重な体験になりました。小さいながら霊体験です。心の変化が直ちに身体の変化に現れたのです。

何日も反省に反省を続けたのに、病気は治らなかつた。ところが、なかばヤケの気分で、反省をやめたら、唐突に病気は治ってしまった。

「波長の法則」は霊的真理です。この場合も、てきめんこの法則が作用したわけです。すなわち、「エークソ、どうにでもなれ！」と思った瞬間に、私の心の波長が変わったわけです。つまり、守護霊に同調できる高級な波長に変わったわけです。では、それまでの、数日間の反省に反省を続けた、あの反省心は高級ではなかつたのか？　そうです、高級ではなかつたのです。「エークソ、どうにでもなれ！」の方が、よほど高級だったので。だから、



おそらく守護霊に感応し、その霊力が私に向けて放射され、一瞬にして私の身体に変化が生じたのです。

いったい、これはどういうことでしょう。その回答はきわめて簡単です。私の反省心とは見せかけで、実は「我」だったのです。「エークソ、どうにでもなれ！」で、私は我を捨てたのです。

いったい、反省心がなぜ我ですか？ このところを、反省魔の私には分かっていたいなかったので。世のいわゆる反省には、この見せかけの我が多いのです。反省の動機、これが問題です。何のための反省か？

私は、病気を治したいばかりに反省していたのです。目的は自分の病気を治す、現実的な利得です。こんなものが反省でしょうか。

神の大いなる意志は、こう言っておられます、「人生の目的は、魂の浄化向上にある」と。すなわち、人生はいつ、いかなる時も、魂の浄化向上を目的として生きなさい、と言っておられるのです。しかるに私は、こともあろうに、病気治しの目的のために、魂の浄化向上(反省)を手段として使おうとしたのです。これでは主客転倒です。神の大いなる意志への反逆です。

これでは、本当の反省など出来ようはずがありません。

どうして、こういうことになったのでしょうか。きつと、私は、病気治しの方を、魂の浄化向上よりも、重く見たからなのでしょう。しかしまた、どうして、そうしたのでしょうか。ここで私は、シルバー・バーチの言葉を、教訓として引用したいと思います。

「人間の目不幸に見えることが、私達の目には幸福に見え、人間には青空に思えることが、私達には嵐の前兆のように思えることがあります。皆さんは物質の目でもものを見るが、私達は霊の目でもものを見ます」。

解答はすべてこの中にあります。神の大いなる意志が、人生はいついかなる時も、魂の浄化向上のために生きなさい、と命じているのは、魂の浄化向上が不変の幸福であるからです。しかるに、私は、いかにも病気を治すことが不変の幸福であるかのように錯覚していたのです。なぜでしょう？ それは「人間の目不幸に見えること」を不幸とし、「人間に青空に思えること」は青空（幸福）と、私が勝手に決めこんでいたからです。バーチは、それはそうではないと教えてくれています。なぜそうかという「皆さんは物質の目でもものを見るが、私達は霊の目でもものを見る」からです。

どっちが、いったい本当でしょう。それはバーチです。人間は本来神の子、今、肉の衣を着ている時も霊、死んでから後もずっと霊であり続けるのです。とすれば、私達もバーチと等しく、霊の目でもものを見るのが真実です。しかるに私は、この肉体の偏頭痛をいかにも最大的不幸のように思い込んでいたのです。そうではありません、私の病気は私の魂の浄化のためにあつたのです。病気に限らず、災厄も、何もかも人生の出来事はすべて、その人の魂を磨くための手段です。それは不幸とか幸福とかいうものではないのです。幸福とは、ただ一つ、魂の浄化向上、すなわち至福の神の子を発現することです。

私達はいつも錯覚ばかりして生きています。あれは幸福、これは不幸と、人生の一つ一つの出来事をそう決めこんで生きています。そこに大きな間違いがあります。もう苦難でも来ると、これこそ不幸であると大騒ぎして、その苦難を通じて学ぼうとせず、それを消すことだけに狂奔します。こうしていつも、その苦難から何も学ぶことがないので、苦難は繰り返し繰り返し繰り返して来ます。本人が本気でそれから学び取るまでです。

どうして人はこうなのでしょう。それはバーチの教えるように、私達が「物質の目でもものを見る」からです。そうです、私達は幸不幸を物質の物差しで測定します。ここに私達の根

源の誤りがあります。

釈尊は教えました、「諸行無常」と。そうです、形あるもの（諸行）はすべて空しい影（無常）です。しかし釈尊はまた教えました、「色即是空、空即是色」と。すなわち、形あるもの（色）はすべて、ある目に見えない根源（空）から射してくる影であると。

ここで私達はもう一度、スライド（幻灯）のことを思い出してみましよう。ネガ（原板）は原因であり、映像はその影です。この世の中のことはすべてこれです。魂がネガであり、目に見える出来事はすべてその映像（影）です。神はその意志をもって、その魂を磨けと言っておられます。これさえ磨けば、必ずその映像（人生の出来事）は素晴らしいものとなるからです。

しかるに私は、魂を磨くことはそつちのけ、影の方である偏頭痛を消そう消そうとしていたのです。これでは、いくら反省（魂の浄化）をしようとしても、病気という影を消すための手段にしかすぎません。これは欲です、迷いです。影にしかすぎないものを必死になって消そうとした迷いであり、また、影である目に見える方（いわゆる肉体的・物質的なもの）への執着・欲です。この欲があるから、私の反省は「我」でした。我ですから、それは本当の

反省ではなく、したがって守護霊に通じることもなく、病気はそれでは治らなかつたのです。私はこの「我欲」を捨てた時、病気は治りました。小さな霊体験ですが、これは人生の万事に通じる悟りです。「我欲」を捨てるいわばコツは、物質の尺度で物事を測らぬことです。霊の目の尺度で物事を見ることです。神の大いなる意志が教えて下さっているように、何かのための魂の浄化でなく、魂のための魂の浄化をすることです。この神の意志をしかと私達が胸におさめてさえいれば、人生は何一つ恐れることはないのです。

### 苦難は名誉なこと

私達はほんとうは余計なことを知る必要はないのです。ただ、神の大いなるご意志を知りさえすれば。すなわち、私達は何のために生きているのか？ただ、何事をするにも魂を磨くために。このことを知ってさえいればよいのです。しかし、すぐ忘れてしまうのです。物質や肉体のことやらが、もつと大事なことで目眩んでしまうからです。そうして、せつせと、魂を汚してまでもそれを求めるのです。

そこで、やはり神のご意志をしかと胸にたたみ込むために、最後にもう一段の靈的知識を、スピリチュアリズムによって学習せねばなりません。それは、人間、何のために生まれ、何のために生きているのか、このことを説いてくれる靈的知識です。それを「因果の法（カルマの法）」と呼びます。

これは法の中の法、最大の法といってよいでしょう。大きく、この中に自己責任とか、再生とか、シルバー・パーチがいつも説いてくれる、自由意志や苦難の法も含まれます。

因果の法とは、一口で言えば「自分が播いたものを、自分が刈り取る」このことにつきます。これから学べば、もうそれでよいのですが、蛇足として以下少し述べます。

人生とは宇宙という畠の中で、貴方が播いた種子から生えた作物を、貴方が毎日毎日刈り取っている、そういうものです。何一つ、たとえば、病氣、宝くじに当たった、いい学校に入った落ちた、誰と結婚した、別れた、どんな境遇の家に生まれたか、誰を親とし兄弟姉妹としたか、人にだまされた、殺した殺された、今日すべて転んだ、大は運命から小は日常の些事まで、すべて貴方が種子を播かなかつたものはないのです。

このことをまず胸におさめることが、人生を知る土台です。なぜかというところ、こうです。

草木のように、原因（種子）のないところに何も生じません。ただし、人は、悪いことはみんな人と環境のせい、良いことはたいいてい自分の手柄と思います。ここが、目の狂うところ。つまり、人生のことは、自分が種子を播かなくても、生えてくるものがあるように思。い込むのです。ところが、ドッコイ貴方が種子を播かなくて生えるものがあるでしょうか。それならば、貴方は神様です。何となれば、神様は、人が吐いた唾、糞尿まで黙って大地で受けておられる、寛容と愛の権化です。もし他人が播いた種子から出た不幸と災厄を貴方が受けているのなら、貴方も生涯それを耐えねばならない、神様と貴方は同じです。貴方にそれが耐えられますか。それよりも、自分の播いた種子から何もかも生えてきたと考えた方が、人生はずっとしのぎやすいのではないのでしょうか。

神は、そのしのぎやすい方に、貴方の人生を創っておられます。つまり、因果の法です。貴方が神の子であるという事実は、貴方は創造力を持つということです。神と同じ、無から有を生じられるのです。ただし、神の無はほんとうに何も無い無ですが、神の子の無とは、何も見えない神の懐の中から、という無です。さて、貴方がいちばん最初に播いた種子はですね、この神の懐の中から取り出したのです。それは神のご意志という種子です。つまり、

生まれて苦勞をしなさい、花実が咲くまで、この苦勞という種子を植えなさい、これです。そうして、これは貴方ただ一人のための種子です。貴方はこれを植えたので、意志をもったのです。生きようという意志です。その次に、この意志から、喜びを知る触覚が芽生えました。それは神のご意志はどこにあるのか、それをまさぐるための触覚で、その触覚の感覚は喜びという感じ です。

貴方はこうして、幸福を求めてさまよう者となりました。喜びの触角で、手当たり次第に何でも触れてみて、これぞ喜び——幸福——と思えるものを手に入れようとする、幸福を追う放浪者です。

ある時は、地獄に堕ちます。肉とか物とかが、これが喜びと感じた時そうでした。しかし、それはまったくの間違いでした。何となれば、神の懐から取り出した種子から、生えてくる花も実も、それは無から生えたから無、つまり「空」なるものだからです。

人々が、病気とか、事業の失敗とか、家庭内のごたごたとか、そういう形の上のことを「不幸」ときめつけて、これを消そう消そうともがく、あの人生の修羅（それこそが現実の人生ですが）、あれは真の幸福「空」を、そういう形の上に幸福を求めようとする人間の錯覚のつくる、修



羅なのですな。

こうして、触角の根のかぎり、人は地上をまさぐり歩きます。だから、自分の触角に触れたものだけを取り上げて人生を創る、言い換えると、彼の触角に触れなかったものは彼の人生ではない、そういうことです。つまり、前生で（数かぎりない前生を含めて）、また今生で、すべて彼の触角が触れ、触れたものから芽を出してまた何かが生まれ、こうして、縁から縁のつながりが果てしなく生み出すもので、彼の人生が創られています。そうして元はといえば、彼が神の懐から取り出した一粒の種子「空」。それから生えた一对の幸福をまさぐる触角、それに触れなかったものは彼の人生に一つもないのです。そうして、その種子こそは、彼のために、神が提供なされたもの、神ご自身である霊、また、これで苦勞をしなさいという苦勞の種子。そしてこの苦勞の種子こそ、親なる神の愛です。

なぜ、それが愛なのだろうか、その秘密は因果の法の中に込められています。すなわち「自分の播いたものを、自分が刈り取る」。これこそは愛です。

私達は「身から出た錆」という言葉を知っています。錆は元来、金属が外気に触れて、その表面に化学変化を起こして生じるものです。しかし、身から出た錆は、内部から出るもの

です。もちろん、外気に触れる表面に出来るのですが、原因は内部にあるのです。すなわち、私達がいふ人生の苦難は、自分が播いた種子、内部から出る身から出た錆です。

単に化学変化で出来た表面の錆なら、他人が拭いても錆は落ちます。しかし、「身から出た錆は研ぐに砥石がない」の諺のとおり、他人の誰にも拭けないのです。拭いてあげても、また内部から出てくるから、本人が自分でその原因を消さないかぎり際限がないのです。

人は神の子です。神の子ということは、これから成人して神になるということです。ですから未完成なものを内部に一杯持っているわけです。もともと人は神ですから、神と同じ完全な神性なのです。しかし、その神性が個としての自覚を持つために、肉の衣を被って一度すべてを忘れたのです。したがって、忘れたという意味では、無いに等しい、すなわち一杯の欠陥に満ちているのです。この欠陥、すなわち未完成の部分、これが内部の錆です。

この錆を消す方法は、自分で消すほかないのです。なぜかという、忘れた神性を思い出さずことですから、自分が思い出すよりほか、人がいくら思い出してくれても仕方のないことです。ですから、因果の法の不滅の一環は、自己責任の法です。

さて、思い出す手口が、まず「自分で種子を播く」ということです。それが原因となつて

結果が出るということです。自分の種子を播かなければ、自分の持っている欠陥は分かりません。また、その種子から花実が着かなければ、その種子が何であるか分かりません。ですから、神は必ず自分で種子を播かせて、必ずその結果が出るようにしておられるのです。その結果が、人の言う、幸福とか不幸、形に現れた現象です。

人はこの現象を見て一喜一憂します。それは影である現象にとらわれた愚かなことですが、しかし、この愚があるがゆえに、人はまた進歩するともいえます。神はこの愚を見越して、幸福と不幸の中に蜜と苦痛を隠されました。人はこの不幸の中の苦痛を味わって跳び上がります。この苦難あるがゆえに、人は、自分が播いた種子が何であるか、すなわちそれが錆であることを悟ります。

こうして、人は播いて、その結果を味わって、苦難に跳び上がり、真実の幸福を求めて、喜びを感じ取る壺である触角を振りふり、歩いている一匹の虫のようなものです。

そこで皆さん、この苦難がどんなに大切な意味を持っているか、お分かりでしょう。もし苦難がなければ、人は決して真実の喜びを探そうとはいたしません。苦難こそは私達を真実の幸福へ導く鍵、むしろ神の愛です。

皆さん、神の手口がお分かりですか。因果の法の中に込められている愛がお分かりですか。苦難こそがその秘薬である意味がお分かりでしょうか。ですから、クート・フーミ大師はこう言っておられます。「苦しみがやって来たことは名譽なことだと思つて、自分のカルマがどんなものであつても、快活に耐えなさい。それはへカルマの神が貴方を助ける値打ちのある者と思つておられる証拠です。どんなにつらくても、さらに一層悪いものでなかつたことを感謝しなさい」。これが苦難の本当の意味です。

私達は、この苦難の本当の意味を悟つた時、神の大きいなるご意志を真実に知る者となります。すなわち、自分で播いて、自分が刈り取り、苦難によつて自己内部の欠陥を知り、自己責任でその一つ一つを克服し、ついに神となる。このコースを私達が逃れずくじけず、喜びと自信をもつて進んで行くためには、どうしても苦難が愛である真実を悟らねばなりません。その時、私達はこの世が魂の愛の試練の学校であることが分かります。その時私達は、世のいわゆる幸福とか不幸とかにとらわれず、人生の万事において、ひたすら魂の浄化と向上のために、それを受け取り、それから教訓を学びとることに専念する者となります。これこそ、神の大きいなる意志が、まさしく神の子とお認めになる、その者ではないでしょうか。